

植物の名前、どうやって調べる？

私は、「植物図鑑の使い方」という講座を毎年春・秋の2回開催しています。講座では、身の回りの植物の名前を知りたい時、どのような手段を使って、どういった手順で調べればよいかを紹介しています。この講座の内容は、私自身が様々な植物の名前を調べた際の実体験が元となっています。詳細な内容は、講座などの機会にお話するとして、ここではその概要について、調べる道筋に沿って簡単に紹介しましょう。

図鑑を使って調べる

植物の名前を知りたい時、手がかりとなるのは、植物の形や花の色といった特徴です。ただし、注目すべき特徴は植物のなかまによって違うので、参照すべき図鑑などの資料も異なります。そのため、まずは調べたい植物のなかまごとに分けます(表1)。

同時に、特定のなかまを対象とした図鑑にも、それぞれの図鑑の目的や作りに違いがあることを知っておく必要があります。具体的には、(1) 記述されている情報量に違いがある (2) 目的の植物にたどり着く方法に違いがある点です。(1)については、特定の地域や代表的な種に

限って掲載した簡便な図鑑と、より多くの種や情報が掲載された専門的な図鑑を思い浮かべるとよいでしょう(図1)。

前者は一般に携帯性に優れ、おおまかに種を調べる場合に力を発揮します。後者は電話帳のような厚さがあることもしばしばですが、より多くの情報を元に、よく似た別の種などを詳細に区別する場合には不可欠です。目的に応じてこれらを上手く使い分けたり、組み合わせたりして利用します。(2)については、主に二つの方法が挙げられます。一つは掲載された写真や図を見ながら、目にした植物と一致するものを探す方法で、「絵合わせ」などと言うこともあります。もう一つは、似た仲間を区別するために特徴をまとめた「検索表」や文字として記述された特徴を読み解き、目にした植物の特徴を確認する方法です。前者は直観的にすばやく候補を絞り込むことができ、後者はよく似た種の識別点を文字として比較し、体系的に調べることができます。後者の方法では確認した識別点を記録しやすいので、やり直したり、他の人に説明したりする場合にも向いています。一方、専門的な図鑑は、多くの場合候補となるものをおおまかに絞り込む仕組みがなかつ

たり、その仕組みを使うことが初心者には難しかったりします。しかし、簡便な図鑑や後に述べるようなインターネット検索、あるいは植物検索アプリケーションを使って、候補となる植物の名前に辿り着くことができれば、専門的な図鑑の索引を使ってその植物の記述を読み解き、よく似たなかまとの違いをきちんと区別することが可能です。

なかま分けが出来たら、それぞれのなかまを調べるための図鑑や資料に従い、注目すべき特徴を確認します。この手順は、文字で書くとは簡単なのですが、名前調べで最も重要、かつ難しいかもしれません。植物の特徴が認識できたら、図鑑などを使って名前を調べます。冒頭で紹介した講座では、草本を花で見分けるためのポイントと樹木を葉で見分けるためのポイントを解説し、実際の植物を使って、識別の実習を行っています。

インターネットの情報から調べる

目にした植物について、名前を調べる方法は、図鑑を使った方法の他にもあります。「赤い花」「河原」「秋」などの一般的な特徴を検索語として、インターネット検索エンジンの画像検索サービス

自然に生育している植物

- 草本
- 樹木
- つる性の植物
- シダ植物
- コケ植物 (蘚類・苔類)

人が植え育てている植物

- 園芸植物
- 栽培植物

植物とされることのあるもの

- 海藻・藻類
- 地衣類・キノコ・カビ (菌類)

表1 調べる図鑑が異なる植物のなかま。



図1 簡便な図鑑(左)と専門的な図鑑(右)の例。図1の草本と樹木に対応。

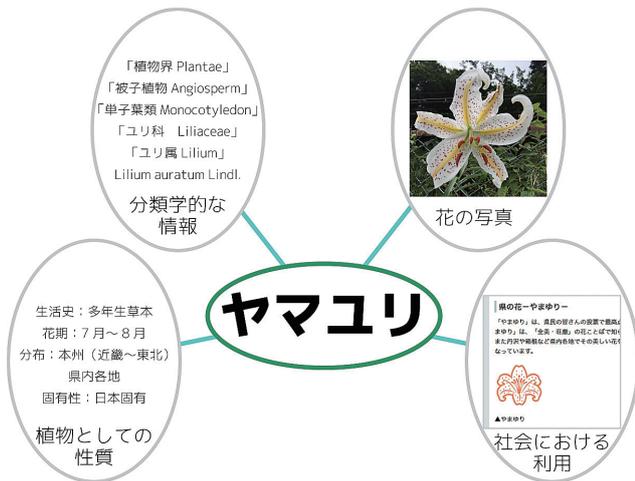


図3 「植物の名前」と植物の情報の断片が結びついている状態のモデル。書籍やインターネットに散らばる情報の断片を「植物の名前」をもとに、手繰り寄せてアクセスすることができる。

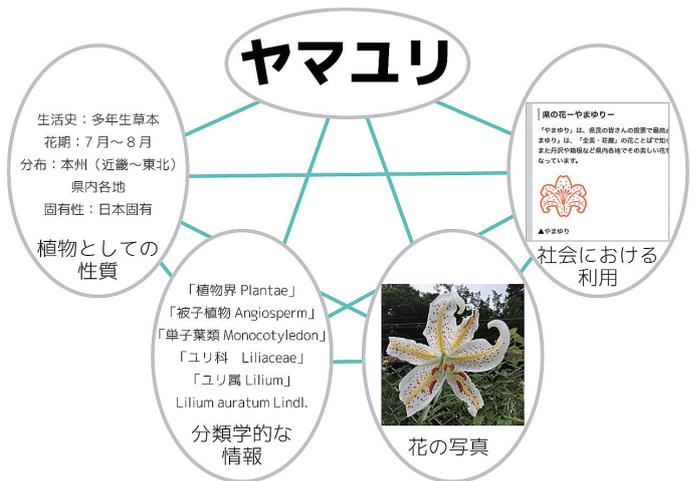


図4 「ある植物」に関連する情報のネットワークのモデル。「植物の名前」も情報の断片の一つ。既にこうした情報ネットワークは共有されつつあり、「植物の名前」だけでなくネットワーク上のどの情報の断片からも、関連する情報の一群にアクセスすることができる。

(例：Google 画像検索) で検索すると、関連する情報を持ったインターネット上の画像がずらりと並ぶので、その中から目にした植物を探することができます。さらに、Google 画像検索のサービスでは、撮影した花の画像を使用して、インターネット上でよく似た画像を探すこともできます。目立つ花のように特徴が表現しやすい植物であれば、こうした方法で「植物の名前」にたどり着けることもあるかもしれません。検索エンジンによる候補の探索を利用した場合には、見つかった画像が目的とする花の名前かどうか、不確かな部分が含まれます。検索結果一覧では断片的な情報のみが抽出されていますし、画像が元々掲載されていたページが専門的な知識を元に書かれているとは限らないからです。ただし、このような場合にも、インターネットで辿り着いた名前を元に図鑑を参照することでより確かな情報を得ることが出来ます。

専用スマホアプリを使って調べる

近年では花の名前を調べるための強力なスマートフォンのアプリケーションもあります。私が愛用しているのは iPhone アプリの「花しらべ」で(図2リンク先参照)、撮影した花の画像を元に候補を絞り込むことが出来ます。写真の中の花の部分を囲むと、画像認識技術によって候補となる花が類似度順に提示されるのですが、上手く撮影すると、それだけで「正解

が最上位に提示されます。この場合にも候補として提示されるものが目的とする花の名前かどうかは不確かな部分が含まれますが、絞り込んだ花の名前を元に専門的な図鑑を参照すれば、より確実に調べることができるでしょう。

植物の名前を調べるということ

ところで、「植物の名前」がわかると、どのような発展性があるのでしょうか。一つには、「植物の名前」をキーワードとして、図鑑を索引から引いたり、インターネット検索することで、関連する情報を手繰っていくことができます。例えば、目の前の花が「ヤマユリ」だと分かったとき、この花が日本の限られた地域に分布すること、神奈川県で過去に記録された場所、花が咲く時期、よく似た種といった植物としての性質を知ることができるでしょう。あるいは、神奈川県の花であること、花屋さんで売られている大きな白いユリの原種の一つであることなども分かるかもしれません。

「植物の名前」があることで、私たちは対象を認識し、情報を共有することができ、関連する情報を手繰り寄せることも出来ます(図3)。ただし、過去には、こうした「目の前の植物の名前」「植物そのものの情報」「社会における利用の状況」といった情報にたどり着くためには、私たち自身が「植物の名前」を元にそれぞれ別の図鑑や事典を本棚から取り出し、紐

解いてそれぞれに調べた上で、結びつける必要がありました。

未来、というより近い将来には、こうした情報の在りかの垣根がさらに消失し、私たち人間が介在しなくても、情報どうしの結びつきがますます発達すると考えられます(図4)。そのような状況では、情報どうしをつなぐ目的では「植物の名前」は不要とも言えます。例えば、道端に咲くヤマユリにスマートフォンのカメラをかざせば、瞬時に「植物の名前」「植物そのものの情報」「社会における利用の状況」が表示されるようなイメージです。カメラをかざせば、様々な情報にアクセスできるのですから、植物の名前を覚える必要はないかもしれません。とはいえ、図5のようなヤマユリに関する情報の一群を、私たちが認識し、私たち人間の間で共有するためには、やはり名前があった方が扱いやすいように感じます。

ともあれ、一体いつまで必要とされるのかは分かりませんが、「この植物の名前は何かだろう?」と疑問を持つ方がいるうちは植物図鑑の使い方講座を続けていきたいと考えています。



図2 iPhone アプリ「花しらべ」へのリンク。